

荒川清秀著

## 中国語を歩く

## — 辞書と街角の考現学 パート3

〔東方書店、二〇一八年五月、二九二頁〕

本書では「中国語を歩く」パート2に続き、荒川氏が街中や工具書から採取した多様な中国語表現を紹介している。それらの言葉との遭遇の瞬間は「目にする」「目につく」「見かける」等のように、言葉への働きかけの局面を明示しない表現によって軽やかに語られる。しかし、この観察行為の実態を働きかけと結果との組み合わせから成る中国語の「看到」で表現するならば、「看」とは言語学者、辞典編集者としての語や語素へのこだわりを携えての探索行為を指し、そうであればこそ「見」が表す結果には著者により「ひっかかる」と表現される状態が含まれる。例えば「入口」は画数も少なく、意味の上でも日本語の「いりぐち」に対応しそであるが故に、通常

はこの文字を街中で見かけても特にひっかからないが、著者の職人的観察を介せば、口語の「進」ではなく、書面語の「入」を含むことや、語素としての独立性の問題等がひっかかり、考察の対象になるわけである。

著者による探索は、時に語や語素が訴えかけてくる「ことばの変化」をも捕捉する。その一つが「溫馨」である。著者によれば、「溫馨」は元々は「溫馨的春夜」のように、「温かく香しい」の意味であったが、現在では比喩義での「溫馨家具」（温かいインテリア）や「溫馨巴」（温かいバー）等の用法に発展している。これは、「溫馨巴士」（やさしいバス）のような揭示に対して、「日本なら、自分から温かい雰囲気のパスとか電車とかいうだろうか」という疑問に端を発する考察であり、これを著者は中国人の自己肯定感の表れとして受け止めた上で、さらに「溫馨提示」（やさしいお知らせ）等の例におけるコロケーションに着目する。「溫馨提示」を冠する「お知らせ

せ」には「电梯只能承载八人」（このエレベーターには八人しか乗れない）のように「親切な注意」と素直に認められるものだけでなく、「三元自助不限量 如有浪费收十元」（三元で食べ放題、取り過ぎには十元の罰金）のようなきつい注意や警告の例もあることから、修飾語の「溫馨」がきつさを和らげていると分析するのである。換言すれば、この種の「溫馨」は「温かい態度でのお知らせ」のように、ある種の態度表明として働いているということになる。「溫馨巴士」の例も同様で、当「巴士」は「溫馨」であろうとしている、と態度表明すること自体が、同時に問題の「巴士」の属性を「溫馨」にしているのだと考えられよう。

本書の読者は幸運にも高精度なセンサーによって採取された言葉の数々をこのように労せずして共有し、自由に謎解きに参加できる。なお、本シリーズの大部分が由来する月刊『東方』での連載「やつぱり辞書が好き！」も目下継続中である。

（加納希美）